

授 業 科 目	単 位	担 当 教 員	開 学 講 期	曜 日	講 時
イ ン ド 学 特 論 I	2	教授 吉水清孝	1学期	火	2
◆ 講義題目	ヒンドゥー教文献講読 (1)				
◆ 到達目標	ヒンドゥー教徒にとって馴染みのある神話・伝説をサンスクリット原典で読み、サンスクリット語解読の訓練を積むと共に、ヒンドゥー教徒の宗教的感性と奔放な想像力を理解する。				
◆ 授業内容・目的・方法	『マハーバーラタ』は、王家の争いに端を発する大戦争を描き、そのなかに社会倫理と宗教の全体にわたる教説を盛り込んだ世界最大の大叙事詩である。今学期は第10巻終盤から第11巻にかけて講読する。第10巻終盤では、パンドヴァ陣地を夜襲したアシュヴァッターマンがシヴァ神の加護を受けていたことが明かされ、シヴァ神にまつわる神話が語られる。毎回出席者全員にテキスト本文を輪読してもらい、和訳を検討し文法事項を確認する。				
◇ 成績評価の方法	(○) 出席 [30%]・(○) その他 (授業での貢献度) [70%]				
◇ 教科書・参考書	原典と英訳は、コピーで配布する。辞書としては、まず M. Monier Williams, Sanskrit English Dictionary をもちい、更に必要に応じて他の辞書・参考書を参照する。(Böhtlingk u. Roth, Sanskrit Wörterbuch ; Mayrhofer, Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen 等)				
その他：出席者はサンスクリット語文法の初歩知識を有すること。					

授 業 科 目	単 位	担 当 教 員	開 学 講 期	曜 日	講 時
イ ン ド 学 特 論 II	2	教授 吉水清孝	2学期	火	2
◆ 講義題目	ヒンドゥー教文献講読 (2)				
◆ 到達目標	ヒンドゥー教徒にとって馴染みのある神話・伝説をサンスクリット原典で読み、サンスクリット語解読の訓練を積むと共に、ヒンドゥー教徒の宗教的感性と奔放な想像力を理解する。				
◆ 授業内容・目的・方法	今学期は、前期に引き続き、『マハーバーラタ』第11巻前半を講読する。第11巻前半では、戦争により百人の息子全員が戦死し失意に暮れるドリタラーシュタラ王を、王の賢臣ヴィドゥラと王の実の父であるヴィヤーサ仙とが慰める。そこでは人間存在と世界全体の成り立ちに関する当時の代表的教説が披露され、運命を見極めて不幸を諦観すべきことが説かれる。毎回出席者全員にテキスト本文を輪読してもらい、和訳を検討し文法事項を確認する。				
◇ 成績評価の方法	(○) 出席 [30%]・(○) その他 (授業での貢献度) [70%]				
◇ 教科書・参考書	原典と英訳は、コピーで配布する。辞書としては、まず M. Monier Williams, Sanskrit English Dictionary をもちい、更に必要に応じて他の辞書・参考書を参照する。(Böhtlingk u. Roth, Sanskrit Wörterbuch ; Mayrhofer, Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen 等)				
その他：出席者はサンスクリット語文法の初歩知識を有すること。					

授 業 科 目	単 位	担 当 教 員	開 学 講 期	曜 日	講 時
イ ン ド 仏 教 史 特 論 I	2	教授 桜井宗信	1学期	火	3
<p>◆ 講義題目 bSod nams rtse mo 著『タントラ概論』の原典講読</p> <p>◆ 到達目標 インド・チベット密教の基礎知識を理解するとともに、チベット語仏典読解力を向上させる。</p> <p>◆ 授業内容・目的・方法 チベット仏教界を代表する宗派の一つ Sa skya 派の第3代管長を務めた bSod nams rtse mo の代表作『タントラ概論』(rGyud sde spyiḥi rnam gshag) の講読を通じて、インドからチベットへと伝えられた密教に関する基本的な知識や理論を学ぶとともに、「蔵外文献」を読みこなす上で必要となる古典チベット語読解能力の向上を図る。</p> <p>◇ 成績評価の方法 ○ 出席 [70%] ○ 授業中に示される理解度 [30%]</p> <p>◇ 教科書・参考書 rGyud sde spyiḥi rnam par gshag pa, 『Sa skya 派全書』 Vol.2 (東洋文庫刊)、pp.1-37。</p> <p>その他：「古典チベット語初級文法の既習者であること」を履修要件とする。</p>					

授 業 科 目	単 位	担 当 教 員	開 学 講 期	曜 日	講 時
イ ン ド 仏 教 史 特 論 II	2	教授 桜井宗信	2学期	火	3
<p>◆ 講義題目 bSod nams rtse mo 著『タントラ概論』の原典講読</p> <p>◆ 到達目標 インド・チベット密教の基礎知識を理解するとともに、チベット語仏典読解力を向上させる。</p> <p>◆ 授業内容・目的・方法 前期に引き続き bSod nams rtse mo の『タントラ概論』の講読を行い、インド・チベット密教学に関する知識の深化と古典チベット語読解能力の更なる向上を目指す。</p> <p>◇ 成績評価の方法 ○ 出席 [70 %] ○ 授業中に示される理解度 [30 %]</p> <p>◇ 教科書・参考書 rGyud sde spyiḥi rnam par gshag pa, 『Sa skya 派全書』 Vol.2 (東洋文庫刊)、pp.1-37。</p> <p>その他：「古典チベット語初級文法の既習者であること」を履修要件とする。</p>					

授 業 科 目	単 位	担 当 教 員		開 学 講 期	曜 日	講 時
イ ン ド 仏 教 史 特 論 Ⅲ	2	非常勤 講師	林 隆 嗣	集 中 (2)		
◆ 講義題目	パーリ註釈文献（アッタカター）の研究					
◆ 到達目標	上座部大寺派の教理体系に則した聖典理解を伝えるパーリ註釈文献（アッタカター）の概要を理解し、それらの研究方法と課題について学ぶ。					
◆ 授業内容・目的・方法	<p>パーリ三蔵を伝承してきた上座部大寺派では、紀元5世紀以降に数多くのパーリ註釈文献が制作された。これらは上座部思想の解明のために欠かせない文書群であるが、研究上さまざまな問題が存在するため、扱いに注意を要する。</p> <p>註釈文献の資料研究と思想研究の方法を具体的に示しながら、研究動向を踏まえつつ、残された課題を考察する。また、註釈文献のなかで上座部の業思想に関連する箇所を選んで講読・解説する予定である。</p>					
◇ 成績評価の方法	○ 出席 [70%] ○ 授業中に示される理解度 [30%]					
◇ 教科書・参考書	プリントを配布する。森祖道『パーリ仏教註釈文献の研究』山喜房仏書林					
その他：						

授 業 科 目	単 位	担 当 教 員		開 学 講 期	曜 日	講 時
イ ン ド 学 研 究 演 習 Ⅰ	2	教授	吉 水 清 孝	1 学期	木	2
◆ 講義題目	インド哲学文献研究 (1)					
◆ 到達目標	サンスクリット語で書かれた学術書の多くは基本典籍の註釈という体裁をとるので、註釈文献の文体に習熟し、あわせてインド思想の諸側面を理解する。					
◆ 授業内容・目的・方法	<p>ヒンドゥー教徒の生活規範を集大成したインドの伝統的法典のうち最も有名な『マヌ法典』には、数々の註釈があらわされたが、註釈のうち全編が現存する最も古いものは、9世紀カシュミール地方の人メーダーティティ（Medhātīthi）が著した『マヌ法典註』（Manubhāṣya）である。この註釈は、分量的にも、それ以降に著されたいずれのマヌ法典註釈をも凌ぐ大部のものであるため、インドの伝統的法意識を解明するうえで最重要なテキストである。今学期は、第1章最終部にある階級論の箇所を読み、古代から中世にかけてバラモンが作り上げた社会意識の基本を押さえる。毎回出席者全員にテキスト本文を輪読してもらい、和訳を検討し文法事項を確認する。</p>					
◇ 成績評価の方法	(○) 出席 [30%]・(○) その他（授業での貢献度）[70%]					
◇ 教科書・参考書	原典と英訳は、コピーで配布する。辞書としては、まず M. Monier Williams, Sanskrit English Dictionary をもちい、更に必要に応じて他の辞書・参考書を参照する。(Böhtlingk u. Roth, Sanskrit Wörterbuch ; Mayrhofer, Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen 等)					
その他：出席者はサンスクリット語文法の初歩知識を有すること。						

授 業 科 目	単 位	担 当 教 員	開 学 講 期	曜 日	講 時
イ ン ド 学 研 究 演 習 II	2	教授 吉水清孝	2学期	木	2
◆ 講義題目	インド哲学文献研究 (2)				
◆ 到達目標	サンスクリット語で書かれた学術書の多くは基本典籍の註釈という体裁をとるので、註釈文献の文体に習熟し、あわせてインド思想の諸側面を理解する。				
◆ 授業内容・目的・方法	<p>今学期は、メーダーティティ (Medhātithi) が著した『マヌ法典註』第4章の冒頭を講読する。この章は、結婚と宗教行事を主題とした第3章に続いて、バラモン家長の日々の世俗生活の規範を主題とする。冒頭部分では生計手段のあり方が議論されているので、第1章最終部の原則論がどのように適用されまた変更されているのかを理解することを目標とする。毎回出席者全員にテキスト本文を輪読してもらい、和訳を検討し文法事項を確認する。</p>				
◇ 成績評価の方法	(○) 出席 [30%] (○)・その他 (授業での貢献度) [70%]				
◇ 教科書・参考書	<p>原典と英訳は、コピーで配布する。辞書としては、まず M. Monier Williams, Sanskrit English Dictionary をもちい、更に必要に応じて他の辞書・参考書を参照する。(Böhtlingk u. Roth, Sanskrit Wörterbuch ; Mayrhofer, Etymologisches Wörterbuch des Altindiarischen 等)</p>				
その他：出席者はサンスクリット語文法の初歩知識を有すること。					

授 業 科 目	単 位	担 当 教 員	開 学 講 期	曜 日	講 時
イ ン ド 仏 教 史 研 究 演 習 I	2	教授 桜井宗信	1学期	月	3
◆ 講義題目	梵蔵漢三本対照による『俱舎論』の講読				
◆ 到達目標	基礎的仏典の読解力を向上させるとともに、重要な術語に関する正確な知識を習得する。				
◆ 授業内容・目的・方法	<p>Vasubandhu (世親) の著した『俱舎論』は、説一切有部の教学を簡潔かつ批判的に纏めた綱要書として余りに有名であり、単に有部の思想を把握する上からのみならず、瑜伽行唯識派など大乘仏教の思想を理解するためにも必要欠くべからざる基本典籍である。</p> <p>この授業では前年に引き続き、同書第2章(「根品」)の梵文原典をチベット語訳・漢訳とも対照させながら講読し Vasubandhu の考え方を理解するとともに、“梵蔵漢3書を比較対照し考察を進める”というインド仏教文献を扱う際の基本的方法を学ぶことを目的とする。</p>				
◇ 成績評価の方法	○出席 [70%] ○授業中に示される理解度 [30%]				
◇ 教科書・参考書	<p>用いる基本資料は次の通り：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・梵文原典：Abhidharmakośa-bhāṣya of Vasubandhu, Ed. by P.Pradhan, Patna, 1967. ・チベット語訳：デルゲ版及び北京版を使用。 ・漢訳：『阿毘達磨俱舎論』(玄奘訳)；『阿毘達磨俱舎論』(真谛訳)。 <p>※『俱舎論』を読解する際に役立つこの他の文献資料については、『梵語仏典の研究Ⅲ』及び『仏教研究入門』が参考になる。</p>				
その他：「サンスクリット語及びチベット語の初級文法の既習者であること」を履修要件とする。					

授 業 科 目	単 位	担 当 教 員	開 学 講 期	曜 日	講 時
インド仏教史研究演習Ⅱ	2	教授 桜井宗信	2学期	月	3
◆ 講義題目	梵蔵漢三本対照による『俱舎論』の講読				
◆ 到達目標	基礎的仏典の読解力を向上させるとともに、重要な術語に関する正確な知識を習得する。				
◆ 授業内容・目的・方法	<p>Vasubandhu（世親）の著した『俱舎論』は、説一切有部の教学を簡潔かつ批判的に纏めた綱要書として余りに有名であり、単に有部の思想を把握する上からのみならず、瑜伽行唯識派など大乘仏教の思想を理解するためにも必要欠くべからざる基本典籍である。</p> <p>この授業では前年に引き続き、同書第2章（「根品」）の梵文原典をチベット語訳・漢訳とも対照させながら講読し Vasubandhu の考え方を理解するとともに、“梵蔵漢3書を比較対照し考察を進める”というインド仏教文献を扱う際の基本的方法を学ぶことを目的とする。</p>				
◇ 成績評価の方法	○出席 [70%] ○授業中に示される理解度 [30%]				
◇ 教科書・参考書	用いる基本資料は次の通り： <ul style="list-style-type: none"> ・梵文原典：Abhidharmakośa-bhāṣya of Vasubandhu, Ed. by P.Pradhan, Patna, 1967. ・チベット語訳：デルゲ版及び北京版を使用。 ・漢訳：『阿毘達磨俱舎論』（玄奘訳）；『阿毘達磨俱舎積論』（真谛訳）。 ※『俱舎論』を読解する際に役立つこの他の文献資料については、『梵語仏典の研究Ⅲ』及び『仏教研究入門』が参考になる。				
その他：「サンスクリット語及びチベット語の初級文法の既習者であること」を履修要件とする。					